

豊橋市美術博物館友の会だより—2008年—夏号

Vol. 69

FU風伯HAKU
Summer 2008



おまかせ
印

展覧会紹介

第4回トリエンナーレ豊橋 星野眞吾賞展 —明日の日本画を求めて—

HOSHINO SHINGO PRIZE, THE 4th TRIENNIAL COMPETITION IN TOYOHASHI SEEKING THE ARTISTS OF TOMORROW

開催中～9月15日[月・祝](月曜休館, 9/15を除く) 美術博物館

後進の画家の支援と育成を願った日本画家・星野眞吾(1923～1997)の遺志を受け、1999年より始まったトリエンナーレ豊橋も本展で4回目を迎えます。今回も「明日の日本画」をテーマに、全国から257点もの意欲的な作品が集まりました。若い世代の出品が多く、20代が100人以上に及び、全体の4割を占めています。これは、この公募展が画家を志す世相にも広く周知・支持されはじめたということであり、若手画家の奨励と顕彰につとめた星野の遺志にも適うものとなったといえるでしょう。このうち審査によって63点の作品が選ばれ、下記のとおり大賞・優秀賞の授賞が決定いたしました。また、本展は過去の大賞授賞者の賛助出品もあり、彼らが現在どのような制作活動を展開しているかを知る機会となります。さまざまな世代による「日本画」表現の多様性をご高覧ください。

優秀賞



面壁
マツダジュンイチ
(京都府京都市)



この度は優秀賞をいただき、光栄に思っています。3年前のトリエンナーレ豊橋が15年ぶりのコンクール出品でした。以前は鉛筆のみの表現でしたが、いつの間にか墨を使い始め、表現の幅が広がった感じがします。風景画を描き続けてきて、自然のエネルギーそのものに迫れないか、目に見えないものを目に見えるように表現できないか。身体で感じたこと全てを「描く」という行為の中で探る日々です。

【審査員所見】

「ケント紙に鉛筆と墨だけを使った一見抽象的な画面であるが、私たちに遠慮と何がしかの注意を起こさせる、意思ある風景のように思えた。」

野地耕一郎(練馬区立美術館主任学芸員)

「非形象の作品を代表して選ばれたこの作品は、その完成度・存在感において同系統の作品を圧していた。」

吉田俊英

星野眞吾賞(大賞)



山水境
加藤良造
(神奈川県横浜須賀町)



この度の受賞の知らせに、ただただ驚いています。「山水画」という古典的な方法が「星野眞吾賞展」という場で、ある意味通用したという事は、制作を続ける上で大きな自信になります。山水の魅力に取り付かれて、ひたすら近づこうとやって来て、ようやくその「中への入り口」にきたと思いはじめた所ですので喜びも一入(ひとしお)です。大変感謝しております。ありがとうございました。

【審査員所見】

「加藤良造氏は東洋山水画の根源としての宋元画の現代版翻案を追究し続けている画家である。今回の作品はこれまでの拡散する画面をより集約的に統合配置する試みを行い、見事に成功している。」

菊屋吉生(山口大学教授)

「連続入選が示す安定度と、伝統的水墨画を意識しつつ自己の世界を構築した力量を評価した。」

吉田俊英(奈良県立美術館副館長)



Quand pleure la lune
梅本雅子
(東京都杉並区)



筆先からこぼれる色や形たちはわたしの全てです。時には確信を持って、時には感情の赴くままに…。そしてそれらはやがて一つの結晶となります。しかし、その結晶は決して一人で紡ぎ出したものではなく、私を見守ってくれた人達との出会いの中から織り込まれたものです。これからも、私を見守り愛し続けてくれる人達のやさしさに応えるために画面と向き合いながら、溢れ出るものとしての結晶を生み出し続けていきたいと思っています。この度は、本当にありがとうございました。

【審査員所見】

「その繊細さ、抜群の描写力、たゆたうようなイメージと不思議なボエジーは出品作のなかで際立っていた。」

菊屋吉生

「空虚に見える空間に陰影に満ちた人間像を配し、現代をさまよう人間の心理の底を覗き込むような幻感を覚えさせる作品として、技量の高さを評価した。」

野地耕一郎

山下清の東海道五十三次展

10月11日[土]～11月16日[日](月曜休館 ただし祝日の場合は翌日休館) 二川宿本陣資料館



放浪の画家・裸の大将「山下清」は、晩年のライフワークとして「東海道五十三次」の制作に挑み、約5年の歳月をかけて東京から京都までのスケッチ旅行をしました。

本作品の制作中、途中の「熱田神宮」まで描きあげた時に体調をくずし、2年後の昭和46年(1971)に他界しました。しかし、静養中に家族には内緒でこっそりと病床において描き続けられ、死後にアトリエの押入れから未完と思われていた京都までの残り13枚が発見されました。こうして、貼絵にはなりませんでしたが、山下清の遺作「東海道五十三次」全55点がペン画で完成されました。

この展覧会では、奇才・山下清が描く東海道五十三次と、貼絵の代表作「長岡の花火」をはじめとする貼絵の数々や、放浪中に愛用した浴衣やリュックサックなどの遺品を展示し、山下清の世界を紹介します。また、豊橋市立高山学園に山下清が訪れた際に、同校にて描いた作品もあわせて展示します。

◆記念講演会 & ギャラリートーク

10月13日(月・祝)午後2時～3時30分

「家族が語る山下清」

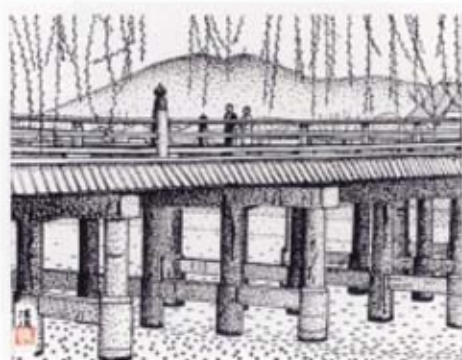
山下浩氏(山下清作品管理事務局代表)

申込み:10/3(金)より電話で

二川宿本陣資料館(41-8580)、先着50名

◆DVDシアター

山下清の制作風景等を収録した貴重な映像を特別公開します。会期中、講義室で随時開催(約30分)



三条大橋(京都) ©清美社

没後20年 関野準一郎の東海道五十三次展 ～街道を描き続けた版画家～

開催中～8月31日[日] 二川宿本陣資料館

まもなく終了です、お見逃しなく!

現代木版画の第一人者として知られた関野準一郎の代表作の一つに、「東海道五十三次」(芸術選奨文部大臣賞受賞)があります。雪国青森出身の関野は瓦屋根に憧れ、15年をかけて、独特の構図で東海道を表現しています。本展では、この「東海道五十三次」全56点を中心に、「薨12題」、「ちょうふ八景」などの代表的なシリーズにより関野準一郎の世界を紹介しています。

《東海道五十三次 二川》

その蒲郡の温泉では、エレベーターの会話で爺さんと親しくなって、一壁面全部から降る大湯滝を爺さんとかわるがわる浴びた。爺さんは先に湯から上がって裸で椅子に座し、団扇を使いつつ民謡を歌っている。それに合わせて私も歌いつつ、棚から下着をとり出し、パンツをはく。酔いと湯のほてりで民謡は調子が出た。すると、爺さんはゆっくり言った。「そや、ちごうておりゃせんかの」

風呂の中でも民謡を合唱していたが、私もしばらく歌わなかったから、歌詞を間違えたのであろうと思った。

蒲郡に私を連れてきてくれた息子がきて「お父さん、

着物を入れた棚を間違っているよ」と言った。私は爺さんのパンツを間違っただけだったのであった。ぬくぬくとして、やわらかく、私のより上等のパンツであった。爺さんは悠々としていた。私はかなり酔って湯でのぼせてしまったのである。

白須賀は海を見おろして汐見阪の眺望があり、二川の傍の境川で遠江国と三河国に分れる。

(関野準一郎「東海道五十三次」1974年より)



「東海道五十三次 二川 月天心」1966年
高浜市やきもの里かわら美術館蔵

豊橋市美術博物館の現実はどうなっているのか

前号までの「これからの豊橋市美術博物館を考える」シリーズは、味岡伸太郎氏のインタビューで終わりました。今号から新たに「豊橋市美術博物館の現実と課題」をテーマに、次の内容で4回の連載予定です。

1. 美術博物館の置かれている現実はどうなっているのか。
2. なぜ地域の文化行政はこうなっているのか。
3. 豊橋市美術博物館はどのような道を目指すべきか。
4. 豊橋市民は、そして友の会はどのような考え、行動すべきか。

第1回目となる今回は、美術博物館の組織はどうなっているのか、予算はいくらなのか、どんな運営方針かなど、現状について取材しました。

豊橋市美術博物館は「教育委員会教育部美術博物館課」

豊橋市には総務部をはじめとして9つの部があり、その他に市民病院、上下水道局、消防本部、議会事務局と教育委員会があります。教育委員会には教育部という1つの部があり、その中に9つの課があってその一つが美術博物館となります。美術博物館の行政的なトップは副館長兼事務長（課長級）で、以下、事務長補佐、主査・主任学芸員、係員という構成になっています。職員は、二川宿本陣資料館の職員4人を含め19人。嘱託員は両方で6人、総員25人。館長職は市の組織上は嘱託員で非常勤という事になります。所管の施設は、美術博物館（昭和54年開館・3781㎡）、二川宿本陣資料館（平成3年開館・2567㎡）、民俗資料収蔵室、埋蔵文化財収蔵庫があります。美術博物館の収蔵庫は、開館から29年目を迎え手狭となり資料の安全な保管が困難な状態となったため、昨年度



美術博物館

整理の方法を見直し、棚の改修を行いました。

美術博物館の目的は、優れた芸術作品の鑑賞の他、郷土を中心とした歴史資料、文化財などから歴史を学ぶ場として広く市民の利用に寄与することです。

しかしそれ以外にも、市民の創作発表の場、ギャラリーとして利用されているのが現状です。

美術博物館の管理・運営は、2つのグループに分かれて行っています。①美術・歴史グループ：資料の調査・研究・収集・保管、そして展覧会、講演会などの企画開催、市史編纂など。美術担当3人、歴史担当1人、嘱託員2人（民俗・歴史）、②管理・文化財グループ：美術博物館の施設・設備の管理、予算事務執行、発掘調査や文化財等の保護や普及事業。管理担当4人、文化財担当5人、同嘱託員2人。もともと2つの係であったものが合併したそうです。文化財事業も大きな事業であるため、博物館とは別に独立した一組織として位置づけられているケースも少なくありません。豊橋市美術博物館は、美術館、博物館、ギャラリー、文化財保護という、それぞれが単独で存在してもおかしくない機能が同居しているのです。

美術博物館館事業費は1億3,400万円

平成20年度の美術博物館費は5億1,000万円、うち人件費が1億3,000万円、文化財保護事業が2億1,400万円。市内での文化財発掘事業にかなりウエイトがかかっています。事業費は1億3,400万円、その中で企画展予



常設展示室

算は7,657万円。前年が6,698万円ですから14.3%のアップとなります。その中で、10月からの「上村松園・松篁・淳之展」は1,900万円。企画展の評価は難しく、来場者数がわかりやすいが、それだけを物差しにすると単なる人気投票か、との声も出てしまいます。企画展は年間7～8件、一つは地域に密着したもの、あとは日本画や西洋画など幅広い芸術に触れてもらえるようバランスが考慮されます。そのほか前年度に収蔵した新収蔵作品を紹介するものや、恒例の豊橋美術展、豊橋市民展などです。また、企画展のほかに、美術館、博物館の生命ともいえる収蔵品を展示する常設展を年に数回テーマを替えています。

絵画等資料購入費は2,800万円

20年度の絵画等購入費は2,800万円、ピーク時には1億5,000万円あったそうです。一年単位で組み立てられる市の予算ですから、例えば今年貯めておいて来年倍にして使うということは不可だそうです。美術資料に関していえば、資料収集の方針は大きく4つあります。

1. 郷土ゆかりの作家で、全国的な視野で美術史的評価の高い作家、または郷土の美術振興に功績のあった作家の作品
2. 郷土の代表的な作家に影響を与えるなど深く関わりのある、全国的な視野で美術史的評価の高い作家の作品
3. 国際的、全国的な視野で特に美術史的評価の高い、内外の作家の作品
4. その他豊橋市美術博物館が収蔵する必要があると評価した作家の作品

方針を読むと、「郷土ゆかりの」と謳ってはありますが、よく読むと柔軟に対応できるようになっています。

収集の手順としては、まず館長や学芸員が全国にネットワークを張り、作家や画廊などからの情報を集め検討。収蔵候補となった作品は、収集委員会（静岡県立美術館学芸課長、名古屋造形大学教授など5人）で、真贋や価格の妥当性、豊橋に収蔵されるべき作品かどうかなど検討します。寄贈作品も同様に検討がなされ、申し出があっても全てが収蔵されるわけではありません。

こうして収蔵した作品は約1,100点、ここで問題が出てきています。現在の収蔵庫は設備的に改修したものの（一部24時間空調、温湿度も管理）、面積は増えていないため、このままだと数年で入りきらなくなる可能性があります。収蔵品を売却し、そのお金で他の作品と入れ替えることは制度上不可能です。買い続けてオーバーフローし、新しく収蔵庫を作る



藤島武二「婦人像」 大正9年
平成19年度購入

のか、改築するのか、今はまだ答えが出ていません。

収蔵品1,100点はどの作品が展示され、どの作品が展示されていないのか、個々の作品の展示歴や評価はどうなっているのでしょうか。

また、学芸員の数は足りているのでしょうか。私たちに感動を与える企画展を考え、素晴らしい作品の購入を検討し、自身の研究を重ね、来場者の疑問にも答え、ネットワークを広げると、学芸員の仕事ぶりがそのまま館の評価にもなるはずで、手がける業務も幅広いぶん、前述した専門の仕事を行う以外の雑々とした業務も相当多いと見受けられます。

厳しい景気と、たぶん増えない予算

先行きどうなるか見えない景気。この先、美術博物館の予算が大幅に増えていくとは考え難いことです。その中で私たちは美術博物館に何を求めていくのでしょうか。たとえば次回企画展「上村松園・松篁・淳之展」へ足を運ぶ際に、作品に心を奪われながらも、誰がこれを企画し、予算はいくら掛かっているのか、何人の人が足を運び、それぞれの人にどんな思いを抱かせたのか、様々に思いを巡らせてみてください。あなたは絵を鑑賞する人、だからこそどんな環境で、どんな企画展を、どんな絵をみたいのか、私たちの街の美術博物館に求める姿を意識していただければと思います。このシリーズへのご意見をお待ちしています。

(風伯編集部)

豊橋市美術博物館開館30年記念

上村松園・松篁・淳之展 —いのちの煌めき、美人画と花鳥画—

10月4日[土]～11月16日[日](月曜休館 ただし祝日の場合は翌日休館) ※初日は午前11時開館

- 上村松園の作品は一部展示替を行います。[前期10/4-10/26 後期10/28-11/16]
- 10/18(土)、19(日)は豊橋まつりのため駐車場をご利用いただけません。公共交通機関をご利用ください。

明治から今日にいたるまで、人々を魅了し続ける上村松園・松篁・淳之の三代による日本画は、いにしへの雅な伝統が息づく京都の気風のなかに育まれました。

明治8年、母がひとりで葉茶屋を営む家に生まれた上村松園は、幼い頃より絵画を好み、女性が画家となるには至難の時代にあつて母の深い愛情に援助され、鈴木松年、幸野楳嶺、竹内栖鳳の3人の師に学んだのち自己の理想とする「香高い珠玉のような」女性像を生涯にわたって追求しました。能や文学、あるいは市井の女性をモチーフとして清澄で気高く優美な作品を発表し、美人画を近代芸術の域にまで昇華させたその画業によって、昭和23年に女性として初めて文化勲章を受章しました。

そうした母松園の姿を眼のあたりに育った長男松篁もおのずと画家を志し、写実性と装飾性が調和した端麗な画風によって花鳥画の分野に新たな表現を創出し、昭和59年に文化勲章を授与されました。

そして松篁の長男淳之も父と同じ花鳥画の道を歩み、日本画の象徴世界のうちに愛惜と讃美をこめて自然の深遠性を描き出し、平成14年に日本芸術院会員に推挙されています。

本展では、松園・松篁・淳之の優品64点により、上村家三代の日本画にあらわされた普遍の美ともいべき研ぎ澄まされた美の世界を紹介します。

◆ミニコンサート

「二胡のしらべ」張 照翔氏(二胡・民族弦楽器演奏家)

10月4日(土)午後2時～ 1階展示室

※申込み不要、ただし観覧料が必要

◆記念講演会

「美を求めて」上村淳之氏(日本画家、松柏美術館館長)

10月26日(日)午後2時～ 豊橋市役所13階 講堂

※聴講無料、当日先着250名

◆ギャラリートーク

10月12日(日)、22(水)、11月6日(木)

午後2時～ 1階展示室

※申込み不要、ただし観覧料が必要



上村松園「わか葉」昭和15年/名都美術館蔵
(10月4日～10月26日展示)



上村淳之「双鶴」昭和54年/松柏美術館蔵



「夕暮」昭和16年/京都府立鴨沂高等学校蔵
(10月28日～11月16日展示)



上村松篁「月夜」昭和14年/松柏美術館蔵

春の研修旅行に参加して

人も犬も助け合う、すてきな金刀比羅への旅。

三重県立美術館と、パラミタミュージアムを巡る今回の企画に参加させていただきましたが、三重県立美術館での讃岐の金刀比羅さんの展示では、金刀比羅参りを人に代わって行う、忠犬に会えました。

一生のうちに一度はお参りしたいと言われていた金刀比羅さんに、金銭的な問題などで行けなかった庶民の代わりとして、首からお供えを掲げ、はるばるお供えに行っていたそうです。そして、旅の途中途中で一緒にお参りに行く人々に助けられながら、または途中で断念せざるをえない人の願いも一緒に受け取りながら金刀比羅へ向かったそうです。

私は岡山県出身なので、香川県の金刀比羅さんとはとてもなじみのある存在です。覚えてはいませんが、たぶん小さい頃に行ったこともあるのだと思います。

しかし、金刀比羅さんがこんなに特殊な場所ということも、こんなにすてきな犬がいることも、その犬の周りにこんなすてきなお話があることも知りませんでした。他にもすてきな作品はたくさんあり、楽しかったのですが、現在では考えられない、首から掲げた大金を奪うでもなく、みんなで助け合いながら旅をしている人々の風景が一番印象的でした。

また、たぶん常設展示なのでしょうが、^{ばんぷうゆうじ}番浦有爾の

作品もすてきでした。少し怖くて、気持ち悪いと言うのが第一印象でしたが、カラスをモチーフにした作品が特に好きでした。元から私はカラスが好きなのですが、凛としていて、頭がよくて、黒々と艶っぽく、ちょっとかわいらしい、そんな感じがよく出ていました。番浦有爾自身、カラスを自宅で飼っていたそうですね。

パラミタミュージアムでは、粘土に版を押して作られた版画家池田満寿夫の「般若心経シリーズ」を見ました。すばらしいと思ったのは粘土の塊に仏の顔を版で押した佛塔シリーズです。

以前パキスタンで、シルクロードをたどって旅行をしました。まだ幼かったので記憶は曖昧ですが、下を流れる濁流と、一面茶色の埃っぽい大地にそびえる山に彫られた仏像はものすごい迫力でした。

パラミタミュージアムのその作品は美術館の台にチンと存在して、同じようにものすごい存在感を放っていました。粘土の塊ではなく、岩山に見えました。パキスタンの石仏を彫った人も、粘土に版を押した池田満寿夫も同じように般若心経を唱え続けたからこそ、同じ存在感が生まれたのではないかと、勝手に思っています。

太湯歩美 (637)

途中入会は会費が半額になります！

今年度から10月以降のご入会は会費が半額(1,500円)となります(正会員のみ)。ぜひお友達をお誘いください。

特典●美術博物館企画展鑑賞2回、二川宿本陣資料館入館1回、会報送付2回、ミニコンサートなど

Museum Check おでかけになりませんか？

会場	会期	展覧会名
岡崎市美術博物館	10月11日～11月16日	石山寺の美—観音・紫式部・源氏物語
豊田市美術館	開催中～9月21日	Blooming:ブラジル—日本 きみのいるところ
愛知県美術館	開催中～10月5日	所蔵作品展 タイムスケープもうひとつの時間
名古屋市美術館	10月18日～12月14日	20世紀のはじまり ピカソとクレーの生きた時代
名古屋ポストン美術館	開催中～9月28日	クロード・モネの世界 ふりそそぐ陽光、色彩のメッセージ
徳川美術館	10月4日～11月9日	室町將軍家の至宝を探る
松坂屋美術館	9月13日～10月19日	マティスとルオー展
名古屋市博物館	9月6日～10月5日	名古屋城を記録せよ
浜松市美術館	開催中～9月7日	パウハウス・デッサウ展
静岡県立美術館	9月12日～10月26日	十二の旅—感性と経験のイギリス美術—
静岡市立芹沢銈介美術館	9月13日～12月7日	きたえぬかれた「魔法の手」芹沢銈介の肉筆画
パラミタミュージアム	9月1日～9月30日	片岡球子展—「面構」と「富士」—
国立新美術館	開催中～9月15日	ウィーン美術史美術館所蔵 静物画の秘密

収蔵品紹介

[奥の手]

星野 眞吾 ● HOSHINO, Shingo

1997年(平成9年) 紙本着彩

72.7cm×60.6cm

第23回从展出品

日本画家であることに基盤をおきながらも、つねに革新と挑戦を続けてきた星野眞吾は、〈人拓〉という表現様式の確立、そして日本画材を駆使した徹底した写真描写の追求で知られていますが、その晩年には白内障・緑内障のため視力が衰え、従来のような細緻な描写が困難となりました。しかし、手の拡大コピーをとり、陰影部に糊と顔料を置くという〈人拓〉を発展させた手法を生み出すことで、技術的な問題を解決するばかりでなく、新たな表現へと展開をみせました。

《奥の手》はこの最晩年の作にあたり、巻物状の和紙をとりつけることで画面を二分し、画の奥の空間、さらには不可視の世界をも予感させます。空間の拡がりとともに、巻き上がるという時間性・運動性や伝統的な軸装を連想させるなど、ユニークで斬新な表現形態です。奥の手とは朱色の手の拓を指していますが、作者のまだまだ手(=表現手段)はあるぞ、という意気込みがうかがえます。多くの画家が年齢を重ねるに従い、自らの表現様式に固執し、その模倣と反復のマニエリスムに陥るなかで、最晩年に至るまでこうした挑戦的・実験的姿勢を保ち続けたということは真に前衛作家であったといえるでしょう。

巻物に描かれた円は掌を拡大し、円相になるように貼り合せたものですが、その中心には小さな円を置いています。まさに掌中の珠といったところですが、コピーの継ぎ目にあることで、珠がその垂直線に沿って落下し、軸の外(外界)へ放たれるような感覚にとらわれます。子宮の育んだ生命の誕生といったイメージとともに、そこには次代の画家たちへの期待も込められているのかもしれない。

星野は晩年、後進の育成と顕彰への遺志をこめて豊橋市に私財を寄附しました。現在、その星野眞吾美術



振興基金をもとにした全国公募展「トリエンナーレ豊橋 星野眞吾賞展」が行われていますが、同展の開催にあわせ、「日本画の前衛」というテーマで今期の常設展示を行います(展示期間: 9/2~11/9)。本作品を含む星野作品を中心に、星野が創立期より深く関わったパンリアル美術協会の主要メンバーの作品、さらに中村正義、水谷勇夫、佐藤多持といった前衛的な日本画家たちも取り上げます。彼らもまた「明日の日本画を求めて」、戦後間もない頃より模索と挑戦を続けてきました。かつての「前衛」的日本画家と新たな世代が挑む日本画表現をあわせてご覧いただき、それぞれの世相の違いとともに、両者に通底する「明日の日本画」へのひたむきで真摯な情熱を感じ取っていただければ幸いです。

(豊橋市美術博物館学芸員・丸地加奈子)

編集後記

表紙の絵を選ぶのは、編集者の楽しみ。上村松園の絵を、パソコンのデータから何十枚と見ていく。年代によって、題材が、絵の空気が変わって行く。これほどの作家でも見続けていると、心に響く絵と、そうでない絵とがある。どうしてこういうことになるのか。作品を描くときの、画家を取り巻く状況なのか、気分なのか、試行錯誤の結果なのか。見る私自身に問題があるのか。「一点の卑俗なところもなく、清澄な感じのする香り高い珠玉のような絵」(上村松園の言葉)を念願として女性を描き続けた中で、表紙に選んだ「花がたみ」はゾクゾクとするようなオーラを放つ、他の作品とは違う情念を感じました。どれほどの想いを上村松園はこの絵の中に込めたのか。私は本物の「花がたみ」の前に立ったとき、どれだけの時間立ち尽くすことになるのか。心にどれだけのことを思い浮かべられるのか。いざ対決! (鈴木伊能勢)

【表紙作品】

上村松園「花がたみ」 大正4年 208.0cm×127.0cm

松伯美術館蔵 「上村松園・松童・淳之展」より(10/28~11/16展示)

豊橋市美術博物館 友の会だより「風伯」第69号

編集・発行 豊橋市美術博物館友の会

会長 原文成

担当副会長 宮田正人

編集長 鈴木伊能勢

編集委員 神野能生子 福島陽子 山崎恵子

協力 豊橋市美術博物館

〒440-0801 豊橋市今橋町3-1 TEL.0532-51-2882

平成20年8月20日発行(5月・8月・11月・2月各20日発行)

平成10年3月17日 第3種郵便物認可 定価200円

※会員は会費に含まれます。※定価には消費税が含まれます。